

「子どもの安心安全を守り育む保育実践尺度 (FCHWS)」の作成

：見守り概念とモニタリング理論を踏まえて

Development of Fostering of Children's Health safety and Wellbeing Scale (FCHWS) in early childhood education and care settings: In reference to "mimamori" concept and monitoring theory

Shoka UTSUMI

要 旨

本研究の目的は、保育者を対象とした子どもの安心安全を守り育むための保育実践尺度を作成し、その妥当性と信頼性を検討することであった。保育所、幼稚園、こども園などに勤務する483名の保育者に質問紙調査を実施した。研究1では、確認的因子分析の結果、「ことばかけ」、「構造化」、「見守り」、「連携」の4因子モデルを採用しFCHWSを作成した。FCHWSの内的整合性と折半法信頼性は十分に高く、構成概念妥当性の検証から収束的妥当性と弁別的妥当性が示された。研究2では、内的整合性は全体的に低い値を示していた。外的基準として関連が予想される概念を測定する尺度とFCHWSの「見守り」「連携」との関連が確認された。1年間の再検査信頼性については、「連携」以外は十分な値が得られなかった。最後に本尺度に関する今後の研究について議論した。

問 題

本研究の目的は、幼児期の子どもの安心安全を守り育む保育者の実践を測定する尺度を作成することである。

近年、幼児教育・保育における国際的動向や我が国の保育に関する制度の変化に伴い、保育の「量」だけでなく、保育の「質」が問われるようになってきている。保育は、その国の歴史・文化や社会制度を背景に成立している。保育の「質」の議論には、保育を就学前教育と捉えるか社会福祉の一環と捉えるかというような保育に対する人々の信念のレベルから、育児休業制度や労働環境といったマクロなレベルの問題に至るまで複数層にわたる要因が関係している。日本の幼児教育・保育は、令和元年10月から無償化が導入され、社会に広く開かれた、より公共的な性格を持つようになった。生涯にわたる人格形成の基礎を培う幼児期の教育の重要性を鑑みれば、保育の「質」は、保護者の「満足度・利便性」のような私事的基準や経営側の「効率」といった市場原理的基準ではなく、子どもの生活・発達への権利保障の観点から、保育者が専門性を発揮し、乳幼児期にふさわしい生活が保障され、子どもたちの成長を支えることが可能な教育・保育の営みを基準とするべきである (OECD, 2006) と考えられる。

日本の保育の特徴

日本の保育は環境を通して行うことを基本としている（文部科学省，2018）。子どもの主体的行動が発揮される環境を整えることは保育において重要な意味を持っているが、環境を通した保育に必要な実践が保育者の「見守り」である。

“（略）このような環境の構成は、教師の行動としてみれば、新しい物を出したり、関わりを増やしたりしていくことだけではない。反対に、その活動にとって不要なものや関わりを整理し、取り去ったり、しばらくはそのままにして見守ったりしていくことも必要となる。”（文部科学省，2018，p39）

新幼稚園教育要領解説（文部科学省，2018）の中の「見守り」の記載は26箇所、新保育所保育指針解説（厚生労働省，2018）における記載は47箇所、新教育・保育要領解説（内閣府・文部科学省・厚生労働省，2018）における記載は54箇所と数多くの「見守り（り、られ）」記述が含まれている。「見守り」は、保育者と子どもとの間の信頼関係の土台である、安心・安定を培うだけではなく、子どもの主体的な活動を促す保育士等による多様な援助方法の一つであると述べられており（新保育所保育指針解説p60）、乳幼児期を通して養護や教育と結びついた保育実践であることが示されている。

海外の研究者は、保育者へのインタビューや保育観察などの質的アプローチによる調査を実施し、日本の「見守り」について様々な解釈を行ってきた。たとえば、Tobin, Wu, & Davidson（1989）は、園児たちの間に生じたトラブルや個人的な問題解決の場面で、そばにいらながらも保育者が介入しないで待つ“ミマモリ（mimamori）”は、日本文化の潜在的な信念を反映した保育実践であると述べている。一方、Bamba & Haight（2009）は、日本の児童福祉従事者が保護人として子どもを注意深く見る“ミマモリ”は、「監視」とは対極的な概念であり、施設で暮らす子どもたちに居場所を与え、社会情緒的に支える社会化実践の一つであると意味づけをしている。しかし、これらの研究は質的アプローチを取っているため、“ミマモリ”と子どもの適応との関連を実証的に検討することが難しい。研究結果の一般化を確認しながら、日本独自の保育実践における質の高さを評価するには、量的アプローチを用いて検討することが必要であると考えられる。

保育実践の評価に関する先行研究

我が国の保育現場では、伝統的に、チェックリストや評定尺度を利用した保育者の自己評価、同僚や管理者からの評価、保護者からの評価や特定機関による第三者評価に加え、園内での個別事例の検討や保育実践の省察などを含め、保育の全体性を大切にしたいホリスティックな方法により、それぞれの保育の実態に即した評価が行われてきた（秋田・箕輪・高櫻，2008）。

丹羽（2001）は、「保育の質の評価」という用語が保育者や研究者の間で知られるようになったのは、1995年全国社会福祉協議会による「保育内容の自己評価のためのチェックリスト」刊行以降と指摘している。このチェックリストは、子どもの発達援助、子育て支援、地域の住民や関係機関等との連携、運営管理など保育全般に対する、保育士による自己評価を目的として作成され、2017年告示対応・改訂版では365項目を収録している（民秋，2019）。また、岩立・諏訪・土方（1997）は、保育の質を6領域（保育者の関係、保育者の保育姿勢、保育のあり方、子どもの姿、親との関係、保育環境・条件）の層に分け、3歳未満児を対象とした、保育者の評価に基づく保育の質尺度を作成している。

欧米の研究において、保育の質は、大まかに、子どもと保育者の相互作用や環境面の適切性など子どもの経験上刻々と変化する側面を示す「プロセスの質」と、保育者対子ども比率、クラスサイズ、保育者の保育経験や学歴、研修など、その施設の人的条件にかかわる「条件（または構造）の質」という2つの相

「子どもの安心安全を守り育む保育実践尺度（FCHWS）」の作成：見守り概念とモニタリング理論を踏まえて互に関連した構成要素からなると考えられている（Mashburn, 2014；大宮, 2006）。欧米の中でもアメリカやイギリスの研究者たちは、保育の質を、以上のような構成要素に分け、客観的に測定することにより比較可能なものとして評価してきた。日本の中でも、保育者集団の省察や発見を通して保育の質の向上を目指すこれまでの日本の評価方法は数量的比較が難しく「客観的」ではないと捉える研究者たちは、海外の研究で保育の質の測定に使用されている保育スケールを、政策レベルでの議論に耐えうるエビデンスに基づいた強力なツールとみなし、日本語への翻訳や現場での普及に努めている（秋田・佐川, 2012）。日本において導入されている、定量的評価による国際比較の可能性を目指した保育スケールには、3-5歳児対象ECERS（エカーズ；Early Childhood Environment Rating Scale）、0-2歳児対象ITERS（イターズ；Infant and Toddlers Environment Rating Scale）、就学前対象ECERS-E（エカーズ・イー；ECERS-Extension）、2-5歳児対象SSTEWE（スチュー；Sustained Shared Thinking and Emotional Well-being）がある（埋橋, 2015, 2018）。

以上の保育スケールは、日本で開発されたチェックリストや尺度を含め、保育の質のプロセスに関して多面的包括的に測定することが可能な点、訓練された評定者による測定を行うことにより客観性が増す点が強みである。しかし、日本と欧米の保育における文化的差異に関する問題点を除いたとしても、数多くのチェック項目や尺度の下位項目および項目の記述内容が満たされているかどうかを判断する指標の多さ、専門性の高い評価者訓練の必要性など、量的調査に用いるにはコストの高い測定といえよう。さらに、SSTEWE（Siraj-Blatchford, 2007）以外は、特定の理論に立脚しておらず、子どもの発達や適応との関連に関する理論に基づいた因果関係の検証が難しい。

安心安全を守り育む保育実践尺度の作成

信頼できる大人が社会的・情緒的に支える“ミマモリ”（Bamba & Haight, 2009）や教育要領・指針等で強調されている支援を前提にした「見守り」に近い概念として、モニタリング（monitoring; Dishion & McMahon, 1998）がある。モニタリングは、大人と子どもの関係性の質と密接にかかわり、時として子どもへの働きかけが伴い、子どもを顕在的・潜在的危険から守り適応を育む大人の意図や配慮を反映していると理論化されている。さらに、内外の先行研究により、保護者のモニタリングと子どもの適応との関連が繰り返し検証されている（内海, 2015）。内海（2019）は、Dishion & McMahon（1998）の理論を踏まえ、子どもの安心安全や適応を「見守る」保育者の行動に対する非参与観察を行い、質的内容分析の結果から、「見守り」は個別に取り出される実践というよりも、関連する保育者の行動や他の保育者との連携と一体化した保育実践の一つであることを示した。

そこで、本研究では、モニタリング研究が実証してきた理論に基づくとともに、日本の保育で重視されてきた養護、すなわち子どもの安心安全を守り育むことを目的とした、「見守り」を含む保育実践を測定することのできる尺度を開発することとした。研究1では、子どもの安心安全を守り育む保育実践を反映した項目により、尺度の因子構造を確認するとともに、折半法による信頼性、構成概念妥当性等を検討する。研究2では、研究1で作成された測定尺度を基に、異なったサンプルを用いて構成概念妥当性等を再検討し、再検査信頼性を検討する。

研究 1

目 的

子どもの安心安全を守り育む保育実践尺度 (Fostering of Children's Health safety and Wellbeing Scale; 以下、FCHWSと略す) を作成し、その因子構造と因子間相関を検証する。内的整合性による信頼性、折半法による信頼性、構成概念妥当性 (収束的妥当性・弁別的妥当性) を検討する。

方 法

調査対象・時期 本調査の対象者は調査会社に事前に登録している日本国籍を持つ20歳以上のモニターから選ばれた。スクリーニングにより、平成28年6月の時点で保育士・幼稚園教諭・保育教諭の現職にあり、保育士資格・幼稚園教諭免許のいずれか、もしくは両方取得しており、幼児クラスを担当している20代から60代までのモニター350名 (女性91%) を対象パネルとして設定した。

調査内容と調査項目 内海 (2019) の観察データから切り出された保育者の行為を示す5種類のカテゴリーに含まれた内容に基づき項目を作成した。『ことばかけ』『確認』『構造化』各10項目、『見守り』『連携』各8項目から成る合計46項目に対して、3名の保育者 (幼稚園または保育所の担任経験者) より質問項目の内容、文言や答えやすさなどを確認してもらった。「ほとんど行わない」「まれに行う」「ときどき行う」「いつも行う」の4件法で尋ねた。他に、基準関連妥当性を測定する尺度として養育尺度 (Parenting in Adolescence Scale; 内海, 2013) よりモニタリング3項目 (7件法)、弁別的妥当性を測定する尺度として主要5因子性格検査の中の開放性 (村上・村上, 1997) 12項目 (2件法) を用いた。以下に構成概念妥当性に関する予測を述べる。

モニタリングは、行動的・心理的自律が達成されつつある青年期の子どもに対して、親や大人が子どもの適応を育むために居場所や活動を追跡し注意を払うことを意味する。Dishion & McMahon (1998) によれば、モニタリングは、文化の差異を超え、青年期の親子間だけではなく、生涯を通じて大人と子どもとの間に存在する行為であると仮定されている。したがって、幼児の適応を育むための保育者のモニタリングと子どもの安心安全を守り育む保育実践との間には正の相関があると予想される。一方、海外の研究において、保育者は一般サンプルに比べ、外向性・情緒安定性・経験への開放性・勤勉性・協調性のレベルが高いと指摘されている (Vorkapic, 2012) もの、保育者の性格特徴やIQは幼児の適応を予測しないことが示唆されている (Araujo, Carneiro, Cruz-Aguayo, & Schady, 2014)。そこで、本研究では、保育者の学歴の高さやIQの高さと関連する保育者の性格特性である開放性は日常的な保育行為と関連を持たないと予想した。

分析ソフトと基準 分析に際して、多変量解析統計ソフトSPSS Statistics ver.26、共分散構造分析ソフト Amos ver.26を用いた。モデルの適合性判定には適合度指標であるカイ二乗適合度検定値 (p 値)、CFI (Comparative Fit Index)、RMSEA (Root Mean Square Error of Approximation) の3種類を用いた。CFIは0.0~1.0の値を取る。 .95より大きい場合は非常に良好、.90以上~.95未満は良好、.90未満はあてはまりの悪いモデルとされる。RMSEAは0以上の正值を取るが、.05未満が非常に良好、.05以上~.08未満は良い適合性、.08以上~.10未満は比較的良好な適合性、.10以上は適合性が悪いと判断される。内的整合性については、クロンバックの α 係数を算出した。さらに折半法による信頼性については、信頼性係数 (ρ) を算出した。

倫理的配慮 本研究は本学の倫理委員会の了承を得たのち、許可された研究計画の手続きに従い行われ

「子どもの安心安全を守り育む保育実践尺度（FCHWS）」の作成：見守り概念とモニタリング理論を踏まえてた。

結 果

分析対象者の属性 対象者の勤務先は、保育所64.3%、幼稚園11.7%、こども園11.7%、小規模/家庭的保育5.7% その他6.6%であった。平均年齢は、38.94 ± 11.01歳、通算保育経験年数13.17 ± 9.38年であった。

因子構造 因子数5（「ことばかけ」、「確認」、「構造化」、「見守り」、「連携」）を潜在変数と仮定し46項目を用い確認的因子分析を実施した。項目選択基準は標準化推定値 .50以上とした。修正指数10以上の誤差項には共分散を設定した。合計42項目による5因子モデルのCFIとRMSEAは満足できる値であったが（ $\chi^2(780) = 1494.066, p < .01$; CFI = .906; RMSEA = .051）、「確認」と「見守り」の因子間相関の値が0.91と高かった。そこで、状況を限定している項目、出席の確認など保育行為の基本事項が多く含まれていた「確認」の項目を外し、4因子モデルで適合性を確認したところ、5因子モデルより4因子モデルの適合度が良好であったことから（ $\chi^2(498) = 910.06, p < .01$; CFI = .925; RMSEA = .050）、4因子32項目から構成される結果を、子どもの安心安全を守り育む保育実践尺度（FCHWS）として採用した（Table 1）。

下位尺度の α 係数は、「ことばかけ」.88、「見守り」.85、「構造化」.75、「連携」.86、折半法による信頼性係数（ ρ ）は、「ことばかけ」.89、「見守り」.90、「構造化」.79、「連携」.86と満足できる値を示していた。因子間相関（ r ）は、.46～.66と中程度の強い値を示しており、「見守り」と「連携」との間の相関係数は最も強い値を示していた。

構成概念妥当性の検証 次に、FCHWSの尺度得点と「モニタリング」、「開放性」との相関係数、および、FCHWSの他の尺度得点を統制した偏相関係数を算出した（Table 2）。「モニタリング」については、FCHWSの4尺度で正の相関、FCHWSの3尺度で正の偏相関がみられた。「開放性」とFCHWSの下位尺度の間には、有意な相関および偏相関はみられなかった。通算保育経験年数とFCHWSの4尺度との間の関連を調べたところ「構造化」とは5%水準で、他の3変数とは1%水準で有意な正の相関がみられた。

尺度得点に関する分析 各尺度の平均値について、理論的中間値（2.5）との差の検定を行った。その結果、「ことばかけ」($t(349) = 44.74, p < .001$)、「見守り」($t(349) = 73.71, p < .001$)、「連携」($t(349) = 60.71, p < .001$)、「構造化」($t(349) = 47.89, p < .001$)と、全ての尺度の平均値は理論的中間値よりも有意に高かった。

研 究 2

目 的

研究1で開発した、FCHWSの因子間相関と構成概念妥当性について、研究1とは異なる基準変数とサンプルを用いて検討するとともに、下位尺度間の関係性、内的整合性による信頼性、再検査信頼性を検討することを研究2の目的とする。

収束的妥当性については、バーンアウト尺度（久保・田尾，1992）を用いた。この尺度は、「脱人格化」「情緒的消耗感」「個人的達成感」からなる。バーンアウトとは、それまでは普通に、あるいは熱心に働いていた人が、突然、燃え盛っていた火が燃え尽きたように、急に仕事に対する意欲が失われ働けなくなることを意味する。脱人格化は人間関係を避けたり、人間である相手を機械的にもののように扱ってしまったりする傾向、情緒的消耗感は心理的虚脱感や疲労感のことである。また、バーンアウトに陥ると、仕事の成

Table 1 安心安全を守り育む教育・保育実践尺度の確証的因子分析結果と記述統計

		標準化推定値	M	SD	
F1 ことばかけ 10項目 ($\alpha = .88$)					
	子どもたちの遊びや普段の行動で危険だと感じた時にはことばかけする	.56	3.82	0.55	
	子どもたちに危険を回避する方法について話す	.69	3.59	0.63	
	水分補給・排泄・手洗いについて適当な時にことばかけする	.67	3.76	0.58	
	気温や活動の変化に合わせて衣服の着脱についてことばかけする	.71	3.68	0.61	
	昼食後は休息をするようことばかけする	.53	3.21	0.97	
	食事時のマナーについてことばかけする	.69	3.70	0.63	
	集まりの時のマナーについてことばかけする	.65	3.51	0.72	
	仲間とのかかわりに必要な言葉や態度を知らせる	.73	3.67	0.59	
	支度がゆっくりな子が仲間とペースを合わせることができるようことばかけする	.57	3.37	0.77	
	トラブルが生じた状況や相手の気持ちについて説明する	.72	3.73	0.56	
F2 見守り 8項目 ($\alpha = .85$)					
	子どもが行動を起こそうとする時、危険予知を意識しながら見守る	.63	3.83	0.44	
	怪我が起こりやすい場所では気を付けて見ている	.72	3.90	0.34	
	時々遊びに入ってみたりしながら、少し離れたところで全体を見るようにする	.56	3.77	0.51	
	食事が進まない、気分がすぐれない子どもについて継続して様子を見ている	.72	3.83	0.43	
	怪我をした子どもの具合について様子を見守っている	.72	3.85	0.41	
	トラブルの後、当事者の子どもたちの様子を見守っている	.75	3.82	0.46	
	子どもの経験が浅い物事の場合、保育者が必ず一人ついて見守る	.54	3.61	0.65	
	初めのときや慣れない間は、一緒にやってみたり手伝いながら見守る	.66	3.81	0.47	
F3 構造化 6項目 ($\alpha = .75$)					
	保育の流れに水分補給・排泄・手洗いの時間を組み込んでいる	.61	3.82	0.50	
	スペースを区切ったり、広く使って遊べるように状況に応じて配置換えを行う	.50	3.46	0.73	
	活動場所を広くし、動線を確保するよう、保育者が物や荷物を整理する	.56	3.64	0.61	
	はさみなど危険が伴う用具や遊具の使い方は事前に扱い方を示す	.55	3.74	0.65	
	活動の切り替えに遊びの要素を取り入れる	.57	3.33	0.84	
	外出時には季節的なものとしての水分補給や防寒具の用意など準備する	.64	3.75	0.59	
F4 連携 8項目 ($\alpha = .86$)					
	戸外遊びの時など担任以外の保育者も目配りが出来るようにする	.54	3.70	0.63	
	安全や健康を守るために職員内で役割分担を行っている	.52	3.63	0.69	
	担任がいないときには他の保育者が遊びの中に入り様子を見ている	.65	3.81	0.52	
	嘔吐や突発的な事故など非常時の場合にはすぐに他の職員に声をかけ協力してもらう	.74	3.87	0.44	
	違うクラスの子どもに起こった怪我やトラブルに協力して対応する	.64	3.70	0.66	
	保育者間でお互い関わった子どもの様子等を伝えあう	.73	3.84	0.42	
	安全策や対応策を考えるために職員全体で情報を共有する	.66	3.77	0.52	
	職員同士で子どもについて気になったことを尋ねる	.76	3.81	0.47	
適合度		因子間相関	F1	F2	F3
$\chi^2(436)$	813.679	F1	—		
p	.00	F2	.59	—	
CFI	.925	F3	.54	.54	—
RMSEA	.050	F4	.46	.66	.55

Table 2 尺度得点モニタリング、開放性との相関係数および偏相関係数

	モニタリング		開放性	
	r	pr	r	pr
ことばかけ	.40 **	.14 *	.07	.06
見守り	.46 **	.11 *	.04	.02
構造化	.39 **	.06	.04	.01
連携	.48 **	.23 **	.00	-.04

注) r は相関係数を, pr は偏相関係数を示す。

* $p < .05$, ** $p < .01$

「子どもの安心安全を守り育む保育実践尺度（FCHWS）」の作成：見守り概念とモニタリング理論を踏まえて
果に伴って生じる自己効力感や仕事に対する意欲などの個人的な達成感が後退する。FCHWSの4尺度の中でも持続した注意などの個人的意欲や情緒的安定の必要と考えられる「見守り」は「情緒的消耗感」と負の関係、「個人的達成感」と正の関係、良好な対人関係的を示すと考えられる「連携」は「脱人格化」や「情緒的消耗感」と負の関係にあると予測をたてた

方 法

調査時期 2018年1月から3月にかけて第1回目の調査、7月から9月にかけて第2回目の調査、2019年1月から3月にかけて第3回目の調査を実施した。

調査対象者 首都圏の保育教育施設（保育所・幼稚園・こども園）27園に勤務する3歳児学級～5歳児学級担任の保育者を対象に無記名での質問紙調査を実施した。分析には、1回から3回までの調査参加者の中から同じ回答者による2回目以降の回答を除いた133名のデータを用いた。信頼性の検討には、2019年度に実施された第2回目・第3回目の調査における同じ回答者33名のデータを用いた。

調査内容と調査項目 FCHWSの「ことばかけ」10項目、「見守り」8項目、「連携」8項目、「構造化」6項目について「ほとんど行わない」「まれに行う」「ときどき行う」「いつも行う」の4件法で尋ねた。

MBI (Maslach Burnout Inventory; Maslach & Jackson, 1981)などを参考に、医療や福祉、教育などの対人サービスに従事する成人を対象に開発された、日本語版バーンアウト尺度（久保・田尾, 1992）の脱人格化（6項目）、個人的達成感（6項目）、情緒的消耗感（5項目）を使用した。この尺度は看護師を対象としているが、保育者への使用に際して、2項目中「患者」と記載されている部分を「子ども」と修正した。このバーンアウト尺度は5件法を採用しているが、中心化傾向を避けるため、宮下（2010）と同様に4件法で、最近6か月間の経験した頻度を、「全くなかった」「まれにあった」「ときどきあった」「いつもあった」で尋ねた。本研究における信頼性は十分であった（脱人格化 $\alpha = .82$ 、個人的達成感 $\alpha = .78$ 、情緒的消耗感 $\alpha = .83$ ）。

結 果

対象者の勤務先は、保育所2.3%、幼稚園81.2%、こども園16.5%であった。年齢の中央値は30-34歳（15.8%）、最頻値は25-29歳（27.1%）であった。通算保育経験年数 12.49 ± 10.51 年であった。

尺度間相関と内的整合性の検証 第1研究とは異なったサンプルにおける尺度間の相関係数とクロンバックの α を求めた。「見守り」は、「ことばかけ」と有意な正の関連（ $r = .21, p < .05$ ）、「構造化」と有意な正の関連（ $r = .43, p < .01$ ）、「連携」と有意な正の関連（ $r = .47, p < .01$ ）を示した。「ことばかけ」は、「構造化」と有意な正の関連（ $r = .37, p < .01$ ）を示したが、「連携」とは有意な関連を示さなかった（ $r = .09, n.s.$ ）。「連携」は「構造化」と有意な正の関連を示した（ $r = .21, p < .05$ ）。 α の値は、「ことばかけ」.76、「見守り」.68、「構造化」.57、「連携」.59であった。第1研究と比較し尺度間の相関係数と α について低い値が得られた。

構成概念妥当性の検証 FCHWSの尺度得点と基準変数として選定したバーンアウト尺度における3つの下位尺度得点との相関係数、およびFCHWS尺度得点の他の尺度得点を統制した時の、基準変数との相関係数を算出した（Table 3）。「ことばかけ」と「構造化」はバーンアウト尺度の「脱人格化」「個人的達成感」「情緒的消耗感」いずれも有意な相関、あるいは有意な偏相関がみられなかった。

「見守り」は、「脱人格化」との間に有意な負の相関、「個人的達成感」との間に有意な正の相関、「情緒的消耗感」との間に有意傾向の負の相関がみられた。「連携」は、「脱人格化」との間に有意な負の相関、「個

Table 3 尺度得点とバーンアウト尺度との相関係数および偏相関係数

	脱人格化		個人的達成感		情緒的消耗感	
	<i>r</i>	<i>pr</i>	<i>r</i>	<i>pr</i>	<i>r</i>	<i>pr</i>
ことばかけ	-.01	-.01	.01	.04	.11	.11
見守り	-.19 *	-.10	.18 *	.11	-.12 †	-.10
構造化	-.01	.09	.05	.01	.07	.10
連携	-.25 **	-.19 *	.15 †	.08	-.18 *	-.14

注) *r* は相関係数を, *pr* は偏相関係数を示す。

†*p* < .10, **p* < .05, ***p* < .01

人的達成感)との間に有意傾向の正の相関、「情緒的消耗感)との間に有意傾向の負の相関がみられた。「連携)と「脱人格化)の間だけに有意な負の偏相関がみられた。

再検査信頼性の検証 第2と第3調査でともに回答した33名のデータを用いて、各尺度の再検査信頼性係数(*r*)を算出した。その結果、「ことばかけ」.48、「構造化」.31、「見守り」.51、「連携」.73であった。

総合考察

本研究では、子どもの安心安全を守り育む保育実践尺度(FCHWS)を作成し、信頼性と妥当性を検討した。ここでは、研究1と2の結果を踏まえて、FCHWSの構造と信頼性および妥当性について考察する。

FCHWSの構造と信頼性・妥当性について

研究1では、先行研究における観察データから得られたカテゴリーとそれぞれの項目を基に、子どもの安心安全を守り育む保育実践尺度(FCHWS)の因子構造を検討した。その結果、FCHWSを「ことばかけ」「見守り」「構造化」「連携」の4因子による下位尺度として構成した。さらに、研究1と2では、これら4尺度の尺度間相関、構成概念妥当性、内的整合性による信頼性、折半法による信頼性、再検査による信頼性を検討した。以下に結果を示す。

尺度間相関の検証 研究1では強から中程度の正の相関がみられたが、研究2では低から中程度の正の相関と、符号の向きは同じであったが関連の強さが異なっていた。研究2での相関係数の値が相対的に低かった理由として、各尺度における α の値が低く、相関の希薄化が生じた可能性が考えられる。しかし、2つの研究結果の共通点として、「ことばかけ)と他の尺度の間の相関係数よりも、「見守り)と「構造化)や「見守り)と「連携)の間の相関係数の値が大きかったことがあげられる。このことは、子どもの安心安全を守り育む保育実践とは、教示による教え込み中心というよりも、保育者の見守る努力とともに、保育者間の協力関係に支えられた、環境を通じた保育という性質を持つことを示していると考えられる。

構成概念妥当性の検証 PASの「モニタリング)とFCHWSの各測定尺度の間に正の関連が認められた。特に、「見守り)とは中程度の正の関連を示しており、大人が子どもの適応を育むために居場所や活動を追跡し注意を払うことを意味する「モニタリング)と保育の具体的実践を踏まえた「見守り)は、共通する部分のある概念であることが明らかとなった。また、「連携)と「モニタリング)の関連も同様に強い結果であったが、子どもの集団サイズが大きく、必然的に他の保育者との連携が重要となる日本の保育の特徴が反映されていたかもしれない。偏相関係数の分析では、「ことばかけ」「見守り」「連携)がPASの「モニタリング)と独自の関連を持っていた。このことから、保育実践の中でも人と人とのかわり、

「子どもの安心安全を守り育む保育実践尺度（FCHWS）」の作成：見守り概念とモニタリング理論を踏まえて子どもの適応を育むことに直接関連することを意味していると推測される。

本研究では、最終学歴については検討しなかったものの、保育者の性格特性である「開放性」は、子どもの安心安全を守り育む保育実践と関連を持たない結果となった。加えて、通算保育経験年数が長いほど実践活動も良好になる関係性が認められた。海外では、保育歴や学歴と保育の質との関連を検証した研究が数多く出されてきたが、知見は一致していない（たとえばBurchinal, Howes, & Kontos, 2002; Slot, Leseman, Verhagen, & Mulder, 2015）。しかし、日本の保育所を対象とした研究では、担当保育士の資格取得に至るまでの学歴ではなく、勤続年数が子どもの発育状況の良さに関連していたことが示されている（藤澤・中室, 2017）。保育士サンプルが過半数を占める本研究においても、類似した示唆となった。今後は、保育士資格や教員免許取得に至るまでの学歴や研修歴のような構造の質が、「ことばかけ」「構造化」「見守り」「連携」のようなプロセスの質の予測因子となるかどうか検討することが必要と考えられる。

本研究では、FCHWSの「見守り」および「連携」とバーンアウト尺度の「脱人格化」「個人的達成感の後退」「情緒的消耗感」との間でのみ、有意もしくは有意傾向の理論的關係性に沿った関連がみられた。この結果は、保育という職務に必要な「ことばかけ」や「構造化」と異なり、意図性を含む「見守り」や他の保育者との「連携」は、保育者の心理的な充実や消耗の程度が影響する可能性を示唆している。また、「連携」は、「脱人格化」と他の実践内容では説明することができない独自の関連を持っていることが示された。保育現場で保育者間の人間関係が良好とはいえない、表面化しないまでも相手を機械的にもののように扱ってしまう傾向は、子どもの安心安全を守り育む実践を損ねてしまう恐れがあるため、保育者の対人関係ストレスへの留意が必要になると考えられる。しかしながら、本研究の場合、関連は有意であってもサンプルは比較的少数で、強さの程度は低かったことから、控えめに解釈するべきであろう。

内的整合性による信頼性 研究1は全ての尺度で十分な値を示していたが、研究2は全体的に低い値を示していた。研究1は保育所の保育士が過半数を占め、研究2ではサンプルサイズの違いや幼稚園教諭が8割以上占めていたというサンプルの性質の違いが影響していたと考えられる。サンプルサイズが小さい場合、代表性の問題だけでなく、標準誤差が大きくなり良い推定値が得られにくくなる。また、保育士より幼稚園教諭のほうが項目に記述された実践について相互の関連性が低いと理解していたなど、調査の際に統制しきれなかった系統的な誤差が混入していた可能性が考えられる。

折半法による信頼性 研究1における折半法による信頼性は、.79 ~ .90と十分な値を示していた。折半法では尺度項目を奇数と偶数のように2つに分け相関係数を求め、スピアマンプラウソンの公式により信頼性係数（ ρ ）を算出する。折半法は、項目間で回答者の反応が一貫している程度に着目した方法であり、各下位尺度に対する研究1のサンプルにおける回答傾向の類似性を意味していると考えられる。

再検査信頼性 研究2における半年の間隔を空けた再検査による信頼性は、.48 ~ .73と低い値であった。尺度開発を研究した論文を対象に、調査間隔1週間から半年以上の間隔の再検査信頼性を検討した高本・服部（2015）では、全ての間隔で再検査信頼性の値の中央値は概ね.70以上を示していたものの、1か月間隔の測定に比べ、半年以上間隔の測定の場合、再検査信頼性の四分位範囲は全体的に低い値を示していた。保育実践を測定する尺度は、期間を長く空けると研修や日々の振り返りを機に保育者の実践傾向が変化する可能性が高い。2時点の測定間隔において真値に変化がないことを検証するには、サンプル数を多くし、1か月程度の間隔で再度測定する必要があると考えられる。

本研究の意義と今後の展望

以上のことから、本研究の目的はある程度達成された。これまで、包括的なチェックリストや欧米の研究に基づいた保育の質を測定する保育スケールは複数開発されてきたが、日本において、保育の質の側面を妥当性・信頼性を確保しつつ簡便に測定することが可能な尺度は少なかった。本研究により、具体的な行動や現象により捉えることの難しい保育の質を反映した構成概念、「見守り」という概念に対して、量的研究方法を用いた分析への可能性が開拓された。

妥当性の中でも特に構成概念妥当性は重要である。測定を行うにあたっては、構成概念を仮定しその構成概念に関する理論を持つことではじめて、構成概念間の関係について予測をたて、結果を解釈することができるようになる（村山航，2012）。今後の課題として、妥当性や信頼性の検証に用いられた本研究のサンプルサイズや代表性は十分とはいえないことがあげられる。十分なサイズの、複数の園種の保育者がバランス良く含まれたサンプルを用いた研究が必要である。本研究で取り上げた変数以外にも、他の保育の質に関するプロセスの要因や条件的（構造的）要因との関連を調べることで構成概念妥当性をさらに検討していかなければならない。また、既存の保育スケールや尺度との併存妥当性の検証も必要である。さらに、FCHWSと子どもの認知的・非認知的側面や適応との関連を検証し、子どもの安心安全を守り育む保育実践と保育の質との関連を明らかにしていかなければならない。

参考文献

- 秋田 喜代美・箕輪 潤子・高櫻 綾子 (2007). 保育の質研究の展望と課題 東京大学大学院教育学研究科紀要, 47, 289-305
- 秋田 喜代美・佐川 早季子 (2011). 保育の質に関する縦断研究の展望 東京大学大学院教育学研究科紀要, 51, 217-234.
- Araujo, M. C., Carneiro, P., Cruz-Aguayo, Y., & Schady, N. (2016). Teacher quality and learning outcomes in kindergarten. *The Quarterly Journal of Economics*, 131, 1415-1453.
- Bamba, S., & Haight, W. (2009). The developmental-ecological approach of Japanese child welfare professionals to supporting children's social and emotional well-being: The practice of mimamori. *Children and Youth Services Review*, 31, 429-439.
- Burchinal, M., Howes, C., & Kontos, S. (2002). Structural predictors of child care quality in child care homes. *Early Childhood Research Quarterly*, 17, 87-105.
- Dishion, T. J., & McMahon, R. J. (1998). Parental monitoring and the prevention of child and adolescent problem behavior: A conceptual and empirical formulation. *Clinical Child and Family Psychology Review*, 1, 61-75.
- 藤澤 啓子・中室 牧子 (2017). 保育の『質』は子どもの発達に影響 するの—小規模保育園と中規模保育園の比較から— RIE TI Discussion Paper Series 17-J-001, 1-4.
- 岩立 志津夫・諏訪 きぬ・土方 弘子 (1997). 保育者の評価に基づく保育の質尺度 保育学研究, 35, 272-279.
- 厚生労働省 (2018). 保育所保育指針解説 フレーベル館.
- 久保 真人・田尾 雅夫 (1992). パーンアウトの測定 心理学評論, 35, 361-376.
- Mashburn, A. J. (2004). The importance of quality prekindergarten programs for promoting school readiness skills. In S.H. Landry & C.L. Cooper (Eds.), *Wellbeing in Children and Families* (pp. 271-296): Hoboken, NJ: WileyBlackwell.
- Maslach, C., & Jackson, S. E. (1981). The measurement of experienced burnout. *Journal of Organizational Behavior*, 2, 99-113.

- 「子どもの安心安全を守り育む保育実践尺度（FCHWS）」の作成：見守り概念とモニタリング理論を踏まえて
民秋 言 (2019). 保育者のための自己評価チェックリスト：幼稚園教諭・保育所保育士・認定こども園保育教諭
—保育者の専門性の向上と園内研修の充実のために— (2017 (平成29) 年告示対応改訂版) 萌文書林.
- 宮下 敏恵 (2010). 保育士におけるバーンアウト傾向に及ぼす要因の検討 上越教育大学研究紀要, 29, 177-186.
- 文部科学省 (2018). 幼稚園教育要領解説 フレーベル館.
- 村上 宣寛・村上 千恵子 (1997). 主要5因子性格検査の尺度構成 性格心理学研究, 6, 29-39.
- 村山 航 (2012). 妥当性概念の歴史的変遷と心理測定学的観点からの考察— 教育心理学年報, 51, 118-130.
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省 (2018). 幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説 フレーベル館.
- 丹羽 孝 (2001). 保育の質の評価モデル研究 名古屋市立大学人文社会学部研究紀要, 10, 119-137.
- OECD. (2006). *Starting strong II: Early childhood education and care*. Organisation for Economic Co-operation and Development.
- 大宮 勇雄 (2006). 保育の質を高める ひとなる書房.
- Siraj-Blatchford, I. (2007). Creativity, communication and collaboration: The identification of pedagogic progression in sustained shared thinking. *Asia-Pacific Journal of Research in Early Childhood Education, 1*, 3-23.
- Slot, P. L., Leseman, P. P. M., Verhagen, J., & Mulder, H. (2015). Associations between structural quality aspects and process quality in Dutch early childhood education and care settings. *Early Childhood Research Quarterly, 33*, 64-76.
- 高本 真寛・服部 環 (2015). 国内の心理尺度作成論文における信頼性係数の利用動向 心理学評論, 58, 220-235.
- Tobin, J., Wu, D., & Davidson, D. (1989). *Preschool in three cultures: China, Japan, and the United States*. New Haven: Yale University Press.
- 内海 緒香 (2013). 青年期養育尺度 (PAS) の作成 心理学研究, 84, 238-246.
- 内海 緒香 (2015). 青年期における親のmonitoringと親の知識: 研究動向と展望. お茶の水女子大学人文科学研究, 11, 113-124.
- 内海 緒香 (2019). 子どもの健康・安全・適応を育む保育の場における見守りプロセスの検討 お茶の水女子大学人文科学研究, 15, 89-103.
- 埋橋 玲子 (2015). 保育の質の評価尺度ECERSとSSTEWの比較検討と今後の課題 同志社女子大学学術研究年報, 66, 179-182.
- 埋橋 玲子 (2018). 諸外国の評価スケールは日本にどのように生かされるか 保育学研究, 56, 68-78.
- Vorkapić, S. T. (2012). The significance of preschool teacher's personality in early childhood education: Analysis of Eysenck's and Big Five dimensions of personality. *International Journal of Psychology and Behavioral Sciences, 2*, 28-37.